

(様式1) 学校評価 <評価:A(1・2) B(3) C(4・5) 数字はアンケート結果を加味する場合>

項目		重点目標 (○:市の重点目標 ◇:学校の重点目標)	キーワード	取組状況・成果・課題	評価	改善策	学校運営協議会委員(評価者)の 意見等
学校運営	教育課程	○特色のある教育課程を工夫するとともに、PDCAサイクルを意識し、評価改善に努める。 ◇PDCAサイクルを生かした教育課程の質的、量的な管理を行う。	カリキュラムマネジメント PDCAサイクル 社会に開かれた教育課程 教科等横断的な視点	○学校行事について、反省や改善点を記入し、全職員で共通理解を図りPDCAサイクルを実践する。 →定期的な月ごとの振り返りシートにより、学校行事等の反省をし、まとめられたものが職員に配布される。また、必要に応じてすぐに改善するものは職員に知らせ実践に結びつけている。 ○見学や体験等から学ぶ学習の機会を多く取り入れ、学習内容を習得する。 →今年度は、校外学習や宿泊学習、修学旅行などすべて実施することができた。事前の学習内容に見直しが必要である。 ○授業時数の確保と学習内容の完全実施を行う。 →教務と担任の連携で、授業時数の確保ができた。教科によって、学習の指導方法の見直しが必要である。	A B A	☆振り返りシートを最大限に今後活用していく。 ☆体験学習を行うことで、より深く児童に感動を持たせるための事前学習を充実させる。 ☆学習内容について、今年度の担任が見直しを行い、次年度の教育課程に組み込む。	別になし
	組織運営	○校務のバランスを考えた人材配置に努める。 ◇健全な児童を育てる職員研修の工夫を行う。	適材適所 研修の充実 働き方改革	○協働体制で校内研修を進めることができる。 →研究授業や授業研究会で他の職員から多くのことを学び、個々の職員の資質向上につながっている。特に、若手職員に効果がある。 ○校内研修等を通して、ITCを工夫して活用することができる。 →外部講師を招いて研修を行ったが、実践的でなかった。まなびPCの利用においては、検索とドリルが主なものになってしまっている。また、オンライン授業への対応が十分でない。 ○教職員評価制度を確認し、自己の資質向上に努める。 →職員が「能力・行動自己評価シート」の項目を確認することで、公務に対する取り組み方を振り返ることができ、「目標・成果自己評価シート」で自己の資質向上につなげている。	A C B	☆1年と2年、3年と4年、5年と6年のブロック間でのつながりを強くし、校内研修で学んだことを実践につなげるように連携していく。 ☆まなびPCの授業での活用の仕方について、情報交換をする機会を増やす。それと同時に、他の学校で取り組んでいる実践内容を収集し、研修を行い、七合小独自のものを作り出す。 ☆自己評価するときだけ振り返るのではなく、日頃から評価項目を意識して取り組むように各自が工夫する。また、管理職は、個々の職員の目標が達成できるよう日頃から助言を行う。	別になし

二	環境整備	○校内外の整理整頓、環境整備に努める。 ◇児童の学習環境の整備と学校設備等の整理に努める。	施設利用 安全点検 教室配置	○教材備品等の整理整頓を行う。 →夏休みに校庭周辺の不要な器具等の整備を行った。ただ、破損した長机、不必要のパイプ椅子の処分が費用がかかるのですぐには廃棄できない。 ○学校緑化環境(花壇、グリーンタイム等)の充実を図る。 →年間計画に従って、花壇や農園の活用を行った。ただ、児童の考えを取り入れた活動ではない。 ○教室(ロッカー、机、いす、床、壁、黒板等)の整理整頓を行う。 →日頃から児童に整理整頓を呼びかけている。しかし、ロッカーの中や道具箱の中など十分に整頓できているとはいえない。	B ☆廃棄用の予算を市に要請する。英語教室の机、椅子の適正数を定め、それ以外は処分をする。 A ☆児童会主体で活動できるよう、年間指導計画の見直しをする。また、児童会を中心に活動することで、自分たちの学級花壇や農園であるという意識を育てていく。 C ☆教師側の働きかけだけでなく、児童会を中心に教室環境について話し合う場を設け、自分たちの学校や学級の環境を自分たちで改善するという気持ちを育てていく。	・必要のないものは捨てる指導を行う。 ・家庭との連携が必要、保護者の意識改革。 ・片付け方を知らないかもしれないので教える。また、片付け支援ボランティアを考えてはどうか。
	地域連携	○地域連携教員を要として、地域とともにある学校づくりに努める。 ◇学校から情報発信と情報収集を行い地域社会と好ましい関係をつくる。	地域とともにある学校 コミュニティ・スクール 地域コーディネーター	○学年だより、学校だより、ホームページ等で情報を発信する。 →学校行事や日常の写真の掲載を継続的に行った。保護者からは、コメントを充実させて欲しいことと、月行事予定表を掲載して欲しい要望があった。 ○地域ボランティア、シルバー人材と連携を図り、学校環境整備や授業支援に努める。 →地域連携教員が地域コーディネーターと連携し活動内容が充実した。今年度は、読み聞かせ、茶道、まゆだま作り、ミシン、ゴルフ、マラソン交通指導、賞状の名前書き等の活動に協力してもらった。 ○地域施設等(市や県の見学地、学校周辺)を積極的に活用する。 →地域施設等の活用状況が新型コロナウイルス感染症が広がる前の状態に戻った。目的を明確にし、活動内容を充実させていく。	B ☆写真へのコメントは、できるだけ内容を充実させることとし、月行事予定表は1月から掲載した。 A ☆学校教育活動を充実させるため、さらに地域コーディネーターと連携をしていく。 B ☆次年度も積極的に活用していくとともに、まず教師が目的をしっかりと把握して児童に伝えていくようにする。	・地域に回覧された学校だよりを読んで、学校の様子が分かると言っている。 ・地域の人、物、事(こと)を活用する。例えば、元七合中学校の郷土資料館や玄関に飾られた焼き物(滝田の登り窯)など。

知 の 教 育	学 習 指 導 ・ 各 教 科 等	○学ぶ意欲を引き出し、主体的に学ぶ児童生徒の育成に努める。 ◇自ら学ぼうとする意欲を育てる学習指導の工夫をする。	主体的・対話的・深い学び	○「めあて」「まとめ」「振り返り」を取り入れて基礎的、基本的な学習内容の定着を図る。 →「めあて」「まとめ」「振り返り」のカードをどの学年も活用して、「わかる」授業に努めてきた。児童のアンケートには「先生は、勉強でわからないことがあると、ていねいに教えてくれる」に対して、今年も全員が肯定的に答えている。 ○話し合い活動、発表、作文等を取り入れて、思考力・判断力・表現力を高める授業の工夫を行う。 →話し合い活動を取り入れ、発表の機会も増えてきた。しかし、3年間のブランクがあるため話し合い活動は、もう一度丁寧に指導が必要である。 ○個々の児童の能力を理解し、「わかる」授業を実践する。 →多くの児童に対して「わかる授業」を実践するように心がけているが、配慮すべき児童に対してが十分とはいえない。ただ、担任一人では限界がある。	B ☆「めあて」の設定、授業のまとめについては、今後研修を通して学び続けていく。(特に、若手教員の育成に力を入れる。)	
	情 報 教 育	○一人一台の情報端末の有効活用に努める。 ◇目的に応じたタブレット活用の工夫を行う。	プログラミング教育 情報活用能力	○必要に応じてタブレットを活用して授業を展開することができる。 →復習のドリルや検索に多く使われている。また、感染症対策でオンライン授業を行う際に活用している。今後は、授業の中でさらに、有効的に使う方法を検討していく必要がある。 ○日常生活の中でのモラル教育(人権・道徳含む)を充実させる。 →まなびPCを使う中で、6年生はモラルに反するスライドへの書き込みがあったり、5年生ではLINE上で悪口等を書き込んだりすることがあった。タブレットの使い方以上に日常生活のモラル教育の徹底が必要である。 ○家庭において有効なタブレット活用法を工夫する。 →家庭科における家庭での調理実習の報告などに使われた。また、感染症により出席停止の際にオンライン授業で使われた。モラル教育が十分行き届いていない不安から家庭への持ち帰りができていない。	B ☆タブレットの使い方に関して、それぞれの先生が実践している内容の情報交換をこまめにする。また、タブレットの活用について長期休業中を利用して研修を行う。 C ☆道徳の授業の充実を図ると同時に、日常生活に授業の内容を生かしていく。コミュニケーション能力を高めるための活動を多く取り入れ、相手の気持ちを理解し、自分の特性を知るように育成していく。 ☆発表しやすい雰囲気づくりに努める。 C ☆家庭と連携してモラル教育を充実させ、授業の補助としてさらに有効に使う方法を模索していく。	・家庭科の授業支援をしているとき、うまくコミュニケーションがとれない、言葉が出ないと感じた。 ・児童を褒めることをすると会話ができるようになるかもしれない。 ・学習支援ボランティアを考えてはどうか。 ・モラル教育は学校だけの問題だけでなく、家庭教育が大切である。 ・いろいろなストレスの解消法や解消する場所などを考えてはどうか。解消することで話しやすくなる。 ・保護者も生活していくことが厳しい世の中で、子供にまで目が行き届かないかもしれない。

	国際理解教育	○英語に触れ、世界を学ぶことで、豊かなコミュニケーション能力の育成に努める。 ◇身近な英語に親しみながら、コミュニケーションを図る資質・能力を育てる。	SDG's 異文化理解 英語コミュニケーション	○ALTとの英語を通して、日本語との違いや英語のおもしろさに気づかせる。 →英語科の授業を通して、どの学年も英語のおもしろさに気付くことができた。 ○英語の聞き取り、会話を通して、コミュニケーション活動の楽しさを実感させる。 →まなびPCを取り入れたグループ活動を行ったりして、コミュニケーション活動の楽しさを体験している。 ○自国と他国の異文化の違いに触れさせる。 →英語科においては、オンラインで外国の生徒とコミュニケーションをとる機会があり、異文化に触れることができた。他の教科においても、授業内容を工夫し、取り入れる場合は、積極的に取り入れるよう努める。	A A B	☆現状を維持する。 ☆まなびPCの使い方を充実させていく。 ☆今後は、英語のみならず、他の教科においても授業の内容に異文化を理解する内容を取り入れていく。(年間指導計画の見直し)	別になし
心の教	児童・生徒指導	○自己指導能力の育成を図り、課題を解決できる児童生徒の育成に努める。 ◇学びに向かう集団作りを意識して、学業指導の充実を図る。	いじめ 不登校 自己指導能力 キャリア教育	○基本的な生活習慣(ABC/R運動)の定着を図る。 →あいさつは、児童のアンケート結果からは65%の児童はよくしていると答えているが、感染症の影響もあり十分でない。授業中話をよく聞いて、姿勢正し学習しているに関しては、50%の児童がよく取り組んでいると答えている。これは、大いに改善に向けての取り組みを検討していく必要がある。 ○学級を学びに向かう集団に高めるために、すべての児童が理解できるような話し方を工夫する。 →姿勢よく先生の話聞いている児童が50%ぐらいである。もう少し、話し方の工夫が必要である。 ○児童の話に耳を傾け、児童が自分で考え判断する言葉かけに努める。 →児童アンケート結果からは、先生に相談したときよく話を聞いてくれると答えた児童は70%ぐらいである。学年によって違いがあり、担任の対応に差が出ている。	C B B	☆年度当初に、学校が楽しく、安全に過ごすための約束ごとについて確認する。また、教室掲示を行い、定期的に振り返りをする。児童会活動に、あいさつ運動、時間を守るなど自分たちで住みよい環境作りに努める取り組みを考え、実践していく。 ☆児童を引きつける話術の工夫すると同時に、その話を引き立てる教材教具を考える。(教材研究をしっかり行う教師の意識向上) ☆教育相談の仕方の研修を行うことと、職員が児童への言葉かけの具体的な事例を定期的に読み返したり、振り返りを行ったりする。(教員の資質の向上)	・子供の良さを褒める。誰にでも良さはある。 ・子供にかける言葉は選ぶべき。

特別支援教育	○共生社会に向け、自分の意見をもち、他者の意見を認め合う雰囲気づくりに努める。 ◇個々の児童の特性の理解とそれに応じた具体的な支援の充実を図る。	インクルーシブユニバーサルデザイン 合理的配慮 自立活動	○校内研修を通して、発達障害のある児童を共通理解し、全校体制で支援する。 →年度当初に発達障害のある児童への対応の仕方について共通理解を図った。必要に応じて、校内特別教育支援委員会を開き対応を検討した。 ○特別支援コーディネーターと連携し、個別の指導計画を作成したりして組織的に対応する。 →特別支援コーディネーターと連携して実施することができた。さらに、担任が保護者と連携して対抗している。 ○特別支援学級と通常学級の児童との交流や共同学習を充実させる。 →6年児童に関しては本人の希望により授業の交流は理科と体育だけであつた。5年と1年の児童は、学習室の担任が付き添って交流学习が行われている。行事等における共同学習は全学年実施された。	B ☆校内研修だけでなく、定期的な情報交換を行い対応を検討していく。 A ☆保護者との連携を密にして、児童の成長を促していく。 B ☆次年度は、知的障害、情緒障害児童とも学習担任や担任のない教員が付き添い、交流学习を行っていく。 (教育糧編成の工夫)	別になし
--------	--	---	--	--	------

命の教育	健康教育	○自分の健康を管理し、健やかに生活する児童生徒の育成に努める。 ◇健康生活に関する実態を把握し、日常生活の問題点や課題を見つけ、自ら考え行動できるようにする。	保健教育 保健管理	・丈夫な体をつくるために体育の授業を充実させる。 →年間行事の中にある、マラソン大会やなわ跳び検定などを体育の授業と連携して丈夫な体力づくりの向上につなげた。 ・七小タイムや昼休みにおける外遊びを奨励する。 →6学年以外の児童は外遊びを意欲的に取り組んでいる。 ・感染症、熱中症等の対応を自ら意識するようにする。 →ほとんどの児童は、自ら意識して対応しているが、感染症に対する慣れも出てきて、大声で話をしたり、接触してふざけ合ったりする児童も出てきた。	B ☆主運動につながる準備運動や補助運動の工夫をする。 ☆「楽しい、できた」を実感できる授業づくりに努める。 C ☆先生側からの声かけを多くすると同時に、外遊びをする機会、例えば、学級遊び、なかよし班の遊び、児童会による遊びなどを設ける。 B ☆新型コロナウイルス感染症が5月8日から5類移行になるので、教育委員会の指導のもと対応を検討する。	・地元の箱根駅伝選手を生かせないか。
	安全教育	○危機意識を高め、安全な生活について判断・実践できる児童生徒の育成に努める。 ◇安全についての知識を高め危機回避能力を育成する。	危機管理 生活・交通・災害安全	○複数の職員で安全点検を毎月行い、必要に応じて速やかに修繕する。 →適切に実施されている。 ○避難訓練(火災・地震・不審者等・引き渡し)を実施することで危険に対する意識を高めさせる。 →計画された避難訓練を実施することができた。特に今年度は、烏山中学校学区で引き渡し訓練も行った。 ○登校班会議、登下校指導等を通して、児童自らも安全に登下校できるようにする。 →交通安全週間に合わせてバス乗車指導、徒歩による下校の見回りを行った。問題が起きた場合は、登校班を集め指導してきた。一列下校やバス児童の待機の仕方など職員で共通理解を図り指導してきた。	A ☆市への修繕の予算請求を継続していく。 児童と職員で行う安全点検を入れる。 A ☆自己の危機管理意識を高めるために事前、事中、事後の指導を徹底する。 B ☆次年度は月1度の登校班会議を開き、振り返りを行うことで児童自ら安全に登下校を促す。	・PTAを含めての安全点検。 ・引き渡し訓練は、万が一を備えて今後も実施していったらどうか。(2, 3年に一度)
	食に関する指導	○食への関心を高め、健康維持に励む児童生徒の育成に努める。 ◇衛生的な食生活の習慣形成に努める。	給食管理 アレルギー	○正しい食事のマナーの習慣化に努める。 →黙食を継続している。食事のマナーができていない児童は家庭と連携したり学級活動で学習したりして対応した。 ○食に関する指導を通して、バランスの取れた食生活を送る指導を継続的に行う。 →すべての学年において食に関する指導の時間を設けた。	B ☆配膳の仕方も含めた給食指導のあり方を年度初めに共通理解を図る。(担任の給食指導の徹底) B ☆食に関する指導を継続し、校内放送での働きかけや、栄養士からのアドバイスをもらう。	・コロナ対策については、文科省や自治体の施策に従う。 ・食事のマナーは、家庭との連携と担任の指導が必要である。